

1400年前からある

日本型の民主主義精神

『和を以て貴しとなす』・・・聖徳太子

日本人は平和を最も大切にしてきた、国家です。

全ての日本人は、聖徳太子の昔から「和を以て貴しとなす」と教えられてきました。「わをもってとうとしとなす」

とは、何事をやるにも、みんなが仲良く、争いごとを起こさないのが良いということ。

聖徳太子が制定した十七条憲法の第一条に出てくる言葉ですが、

「礼は之和を以て貴しと為す」とあり、「和」の精神とは、体裁だけ取り繕ったものではなく、自分にも人にも正直に、不満があればお互いにそれをぶつけ合い、理解し合うということが本質ではなかろうか、という意味です。

つまり、「お互いに認め合う気持ちを持ち、《正しいところは正しい、間違いは間違いだ》と素直に認められるような是々非々の議論をするべき」ということです。

これは戦後の小学校・中学校の社会科の歴史で教えられてきました。

ですから、少し前までは、日本の1000円札紙幣には聖徳太子の肖像画らしきものが印刷されていました。いわば

ル紙幣に描かれている「フリーメイスン」のようなもの、なのでしょう。

謎の多い聖徳太子

聖徳太子は574年、「用明天皇（ようめいてんのう）」と「穴穂部間人皇女（あなほべのはしひとのひめみこ）」との間に生まれました。この2人とも「欽明天皇（きんめいてんのう）」の子供で兄妹なのか姉弟なのか定かではありませんが、その当時は母親が違っていても同じ父親の子供どうしでも結婚ができたようです。

聖徳太子は幼名を「厩戸皇子（うまやとのおうじ）」と言っていた事はよく知られています。

「キリスト教の救世主イエスキリストが馬小屋で生まれた」と聖書に記されていることとダブリ、大いに想像を膨らませてくれました。

厩戸皇子（うまやとのおうじ）という名

前は母親（穴穂部間人皇女）が馬小屋の前で急に産気づいて、その場で産んだために付けられた名前だと伝えます。

さらに謎を深めるのは聖徳太子のお父さん「用明天皇」の母親は「堅塩媛（きたしひめ）」、聖徳太子のお母さん「穴穂部間人皇女」の母親は「小姉君（おあねぎみ）」で2人とも「蘇我稲目（そがのいなめ）」の娘。これまた姉妹です。

「厩戸皇子（聖徳太子）」は天皇と蘇我氏のハイブリッドだった

聖徳太子は当時の超有力豪族である「蘇我氏（そがし）」の血を両親から2重に受けている特別な地位におり、この蘇我氏のもとには渡来人（中国・朝鮮から日本に移住して高度な文明をもつ人々）がいて、厩戸皇子（聖徳太子）は渡来人達から「儒教」・「仏教」・「暦学」などの英才教育を受け、青年期には「最新アジア情勢」も渡来人達からいち早く伝えられる環境に育ちます。

当時のアジア情勢は、中国は「後漢（ごかん）」が西暦220年滅亡。分裂・戦乱の時代が約370年間続き、「隋（ずい）」と言う国によって再び統一（589年）という、時代。370年間も内戦を続けていた中国を「隋」が統一するのだから、「隋」の軍事力・外交力・政治力はかなり強いです。「隋」の周辺諸国は戦々恐々としていました。

日本も「隋」の周辺諸国と同じく戦々恐々としていたに違いありません。

当時の「隋」は「律令制」と言う「律（り

つ・刑法）」と「令（りょう・行政法と民法）」による中央集権国家に適した政治体制を採用。律令制を補完する国家宗教としての「仏教」も採用していました。

「隋」が中国統一をしてしまった事を受け、日本が対処するためには「隋」の政治体制を取り入れ「豪族達の連合政権」から「天皇中心の中央集権国家」へと政治体制の大改革をしなければなりません。

つまり、日本は「隋」の脅威に対して「隋」と同じ「律令制」と「仏教」を一刻も早く導入し、「隋」に対抗する必要があったのです。

◆いわば、軍拡競争のようなニュアンスでしょうか！？

いつの時代でも軍事力の拮抗は抑止力を生み出します。◆

蘇我馬子は強大な『隋』（中国）に 対向しようとする

そこで、いち早く立ち上がったのは「蘇我稲目の子供、蘇我馬子（そがのうまこ）」です。

渡来人達との関係が深くアジア情勢にも詳しく蘇我馬子は日本に「律令制」を導入する手始めに「仏教の導入」を急ぎます。この「仏教導入」に反対する豪族「物部守屋（もののべのもりや）」を一戦交えて攻め滅ぼします。（587年）

蘇我馬子はその直後に「法興寺（ほうこうじ・飛鳥寺）」の建立に着手しています。ちなみに蘇我馬子が物部守屋を滅ぼした戦いで、厩戸皇子（聖徳太子）は戦勝祈願の

ため、自ら四天王の像を彫ってこれに祈り、蘇我馬子が勝利を得たのを感謝し、四天王（像）へのお礼に建立したお寺が大阪市天王寺区にある「四天王寺」とのことです。

蘇我馬子は日本への仏教導入に反対する勢力を抑えることに成功、それを日本中に知らしめるために「法興寺」を建立したのでしょう。

蘇我馬子は強敵の豪族「物部氏」を攻め滅ぼしてのトップに立った後で次の課題「律令制の確立」に向けて動き出します。

絶対権力者の蘇我馬子は律令制のため「崇峻天皇」を即位させる

そこで、自分の意見が通りやすい天皇を即位させて「裏から操るのが得策」と考えた蘇我馬子は厩戸皇子（聖徳太子）の父である用明天皇の死後、自分の甥である「崇峻天皇（すしゅんてんのう）」を即位させます。（587年）

しかし、この崇峻天皇が自分の言うことを聞いてくれないと知るや自分の手下である「東漢直駒（あまとのあやのたいのこま）」を差し向け、崇峻天皇の兄の「穴穂部皇子（あなほべのみこ）」もろとも暗殺してしまいます。（592年）

苦肉の策で日本初の女帝「推古天皇」が誕生

ここで蘇我馬子は「はた！！」と困ります。自分の意見を通しやすい蘇我氏の血を

引く天皇候補がいなくなってしまったからです。

厩戸皇子（聖徳太子）は蘇我氏の血族で頭も良く天皇となる有力な候補ですが、まだ年も若く、また暗殺した崇峻天皇の甥でもあり、天皇と担ぎ上げるには無理があります。

そこで浮上してきたのが「額田部皇女（ぬかたべのひめみこ）」。

彼女は聖徳太子のお父さん「用明天皇」の妹であり、今は亡き「敏達天皇（びたつてんのう）」の皇后でもあったので血筋も位も申し分ありません。

そこで厩戸皇子（聖徳太子）を「摂政（せつしょう）」兼「皇太子（こうたいし・次期天皇候補）」の地位につけて蘇我一族が厩戸皇子に協力すれば、将来は厩戸皇子（聖徳太子）が天皇となり蘇我氏一族も安泰、政治も安定させることができる、と絵図を描きます。

そして蘇我馬子は彼女を天皇に即位させ、日本初の女帝「推古天皇（すいこてんのう）」が誕生します。（592年）

日本は「推古天皇」「聖徳太子」「蘇我馬子」の3人体制で動き出す

翌年（593年）4月10日、推古天皇の「摂政」「皇太子（次期天皇候補）」として厩戸皇子が選ばれ、「推古天皇」「聖徳太子」「蘇我馬子」の3人体制で律令制度の確立へ向けて日本が動き出します。

しかし聖徳太子はおじさん2人（崇峻天皇&穴穂部皇子）を蘇我馬子に殺されてい

る事を知っています。先走った行動をすれば聖徳太子が蘇我氏の血族で優秀な人材であつてもたちまち蘇我馬子によって殺されてしまうかもしれません。

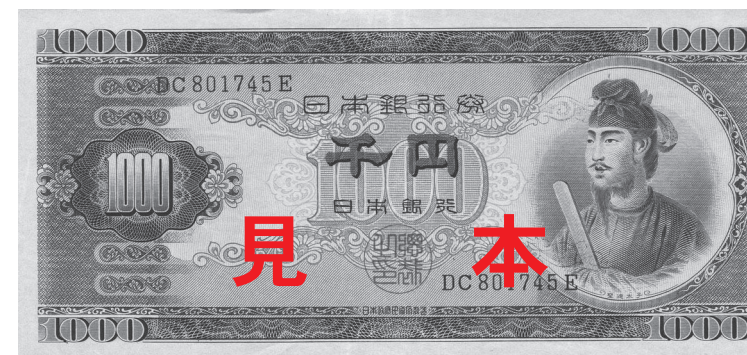
聖徳太子にとっては難しくも危険な3人体制でのスタートとなります。

そのせいか593年に摂政となった聖徳太子は最初の7年間は目立った行動をせず「冠位十二階」や「十七条憲法」「遣隋使の派遣」などは600年代に入ってから行ったことだそうです。

これも謎なのですが608年を境に聖徳太子は政治改革の表舞台から姿を消し、仏教の普及や歴史書の編纂などの事業に携わっていくことになります。

★「聖徳太子、推古天皇の摂政になる」（593年）を参考にしました。

聖徳太子の紙幣画像



画像は（上）一万円紙幣、（下）千円紙幣
「Wikipeddis」より